

掛川城址発掘調査概要報告書

2001

掛川市教育委員会

掛川城址発掘調査概要報告書

2001

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、掛川城址において平成元年度以降に発掘調査を実施した 6 地点の調査で確認した遺構と遺物について、写真で紹介する概要報告書である。
2. 発掘調査は掛川市教育委員会が主体となり実施した。調査地点と調査員は以下のとおりである。
 - ・天守丸・本丸……………戸塚和美
 - ・大手門・大手門番所……………戸塚和美・大熊茂広・井村広巳
 - ・市立第一小学校……………大熊茂広
 - ・掛川市二の丸美術館……………戸塚和美
 - ・掛川市中央図書館……………戸塚和美・村松弘規
 - ・龍華院……………村松弘規・前田庄一
3. 発掘調査費用・整理調査費用は、龍華院本堂・庫裡建設に係る調査費用を宗教法人龍華院の負担で、また龍華院地点の土塁の調査を国庫補助事業で行い、それ以外は市の単独事業として行った。
4. 本書の執筆・編集は、前田庄一が行った。本書で使用する遺構名称は、調査時のものをそのまま使用している。
5. 本書の編集にあたり、次の方々から御教示を賜った。記して謝意を表したい。(敬称略)
足立順司・荻原圭子・川口安曇・柴垣勇夫・杉山友太郎・松井一明・向坂鋼二・吉岡伸夫
6. 調査で出土した資料や作成した資料は、掛川市教育委員会が保管している。

目 次

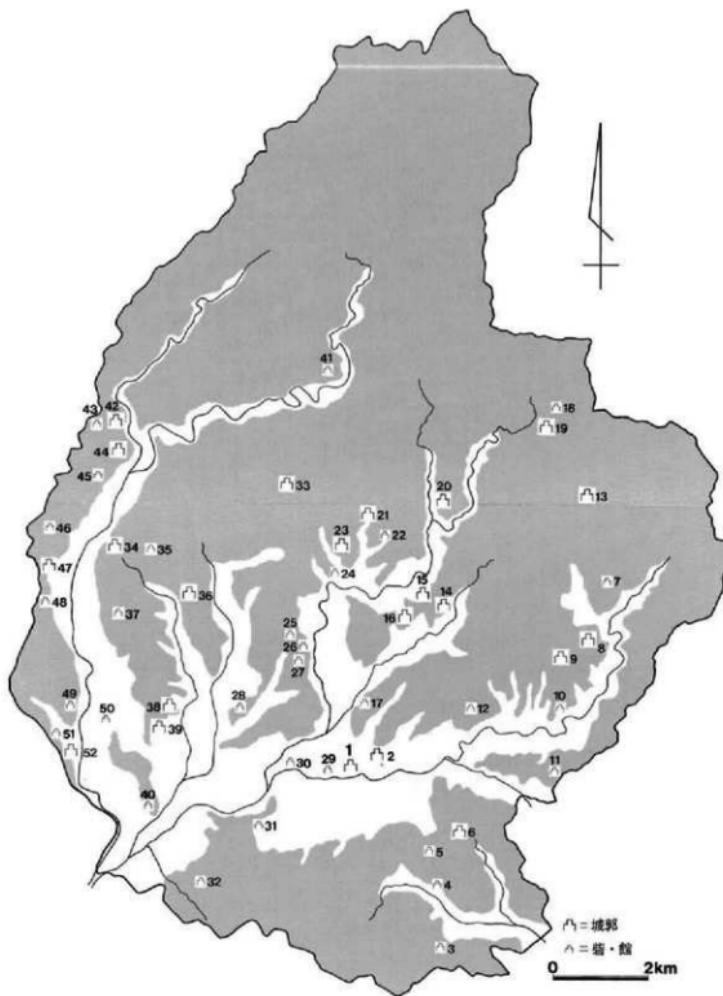
I 序章.....	2
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	2
II 天守丸・本丸地点.....	5
1. 調査の概要.....	5
2. 遺構の概要.....	5
3. 遺物の概要.....	6
III 大手門地点.....	19
1. 調査の概要.....	19
2. 遺構の概要.....	19
3. 遺物の概要.....	19
IV 山下郭(1)地点.....	24
1. 調査の概要.....	24
2. 遺構の概要.....	24
3. 遺物の概要.....	25
V 二の丸地点.....	38
1. 調査の概要.....	38
2. 遺構の概要.....	38
3. 遺物の概要.....	39
VI 山下郭(2)地点.....	50
1. 調査の概要.....	50
2. 遺構の概要.....	50
3. 遺物の概要.....	51
VII 蓮華院地点.....	65
1. 調査の概要.....	65
2. 遺構の概要.....	65
3. 遺物の概要.....	65
VIII まとめにかえて.....	69

挿 図 目 次

第1図 市内の城砦分布図.....	1
第2図 調査地点位置図.....	3

図版目次

図版1	上 天守丸	図版28	出土遺物(7)
	中 登閣路	図版29	上 一面目全景
	下 中世墳墓群		中 堀の中に廃棄された瓦
図版2	検出遺構(1)		下 完掘全景
図版3	検出遺構(2)	図版30	検出遺構(1)
図版4	検出遺構(3)	図版31	検出遺構(2)
図版5	検出遺構(4)	図版32	検出遺構(3)
図版6	検出遺構(5)	図版33	上 鉄軸広口壺
図版7	上 S P39出土陶器		中 輸入青磁・白磁・染付
	中 輸入青磁・白磁・染付		下 染付鉢・染付皿
	下 水滴	図版34	出土遺物(1)
図版8	出土遺物(1)	図版35	出土遺物(2)
図版9	出土遺物(2)	図版36	出土遺物(3)
図版10	出土遺物(3)	図版37	出土遺物(4)
図版11	出土遺物(4)	図版38	出土遺物(5)
図版12	出土遺物(5)	図版39	上 建物の基礎
図版13	上 大手門跡		中 S B01・S A02
	中 番所跡と土塁石垣		下 調査区全景
	下 大原地盤石と礎石根固め石	図版40	検出遺構(1)
図版14	検出遺構	図版41	検出遺構(2)
図版15	出土遺物(1)	図版42	検出遺構(3)
図版16	出土遺物(2)	図版43	上 二彩・緑釉陶器
図版17	上 柱穴列		中 金箔かわらけ・金彩木製品
	中 上層の遺構		下 琥珀釉金彩鉢・染付皿
	下 下層の遺構	図版44	出土遺物(1)
図版18	検出遺構(1)	図版45	出土遺物(2)
図版19	検出遺構(2)	図版46	出土遺物(3)
図版20	検出遺構(3)	図版47	出土遺物(4)
図版21	上 緑釉陶器	図版48	出土遺物(5)
	中 漆塗り椀	図版49	出土遺物(6)
	下 志戸呂産甕	図版50	出土遺物(7)
図版22	出土遺物(1)	図版51	出土遺物(8)
図版23	出土遺物(2)	図版52	上 S E01
図版24	出土遺物(3)		中 土塁の断面
図版25	出土遺物(4)		下 篠り金具
図版26	出土遺物(5)	図版53	検出遺構
図版27	出土遺物(6)	図版54	出土遺物



- 1.掛川城 2.掛川古城 3.岩井寺砦 4.和田砦 5.青田山砦 6.杉谷城 7.大向砦 8.本宮山城 9.伊達方城 10.塙井川原砦 11.大六山砦 12.成瀧館 13.杉原城 14.慶谷城 15.初馬城 16.水垂城 17.天王山砦 18.松葉城 19.河合氏館 20.倉真城 21.滝ノ谷城 22.平尾氏館 23.美人ヶ谷城 24.柏谷氏館 25.石ヶ谷館 26.西郷氏館 27.相ヶ谷砦 28.龍穴峰砦 29.観見氏館 30.金丸山砦 31.河田砦 32.曾我山砦 33.高森山砦 34.本郷城 35.原砦 36.高藤城 37.中之谷館 38.森平城 39.富部城 40.岡津砦 41.孕石館 42.社山城 43.明神山砦 44.柳原城 45.寺田館 46.幡籠城 47.西山城 48.吉岡館 49.吉岡砦 50.高代山砦 51.各和氏砦 52.各和城

第1図 市内の城砦分布図

I 序 章

1. 地理的環境

掛川市は、東経138度00分、北緯34度45分が通り、日本の国土のほぼ中央に位置する。静岡県内では、大井川と天竜川の間にあり、静岡市から約50km、浜松市から約30kmの距離にあり、人口8万1千人余りである。東遠（東遠江）1市7町の中で、面積・人口とも約35%を占め、当地域の中心的な都市である。市内を東海道本線、東海道新幹線、国道一号線及びバイパス、東名高速道路という太平洋ベルト地帯の4大動脈が通り、新幹線掛川駅、東名高速道路掛川インターチェンジをもち、東遠の表玄関の役割を果たしている。

地形は、東に牧ノ原台地、南に小笠山丘陵、北は赤石山脈から派生する丘陵に囲まれ、その間に中小河川により形成された小冲積平野が広がっている。

掛川城は、この小冲積平野を東西に横切る東海道を見下ろす位置にある平山城である。

2. 歴史的環境

明応6年（1497）から文亀元年（1501）のころに駿河守護職今川氏親が重臣朝比奈泰熙に命じて、現在の掛川城の北東約350mに掛川古城を築いたとされる。その後、今川氏の勢力拡大と朝比奈氏の地位上昇に伴い、掛川古城から現在の掛川城の地に城を移したと考えられる。その時期は、遠歎御宗長が著した『宗長手記』上に、永正9年（1512）に没した朝比奈泰熙の時に新城の工事が始まっていたことを記しており、永正10年（1513）に一応の完成を見たと考えられる。

永禄3年（1560）に桶狭間の戦において今川義元が織田信長に討たれると、武田信玄と徳川家康の今川領国分割領有の密約により、永禄11年（1568）信玄は、駿府の今川館に義元の子氏真を攻めた。そこで氏真は、重臣朝比奈氏を頼り掛川城へ敗走した。これに伴い、徳川家康は三河から遠江へ侵攻を開始し、永禄11年12月から翌年の5月まで氏真が籠もる掛川城を攻め、半年の籠城の末、ようやく無血開城となった。第1図の青田山砦⑤、杉谷城⑥、天王山砦⑦、金丸山砦⑧、河田砦⑨、曾我山砦⑩は、この時の徳川方の付城である。その後、家康の家臣石川家成が城主となった。

天正18年（1590）豊臣秀吉は家康を関東に移すと、配下の山内一豊を掛川城主に任命した。一豊は、慶長5年（1600）までの在城中に、天守閣の築造、城郭規模の大規模化、絶構の構築を行い、中世的な掛川を近世城下町に発展させた。

江戸時代は、徳川親藩や諸代大名の居城となり栄えたが、明治2年（1869）廢城となった。

明治2年の廢城、明治4年（1871）の廃藩後は、二の丸御殿が学校として利用され、後に町役場、農協等として利用された。昭和29年掛川市が誕生すると、三の丸に市庁舎が建設されるなど、城址は市の行政の中心となった。

昭和63年からスタートした天守閣復元事業に伴い、天守丸・本丸等、駅北土地区画整理事業に伴い大手門、市立第一小学校のプール改築に伴い山下郭、二の丸美術館建設に伴い二の丸、市立中央図書館建設に伴い山下郭、龍華院本堂建設等に伴い龍華院地点の発掘調査を実施した。

本書は、これら6地点の発掘調査の概要を、調査地点ごとに紹介するものである。



1. 天守丸・本丸地点 2. 人手門地点 3. 山下郭(1)地点 4. 二の丸地点 5. 山下郭(2)地点
6. 龍華院地点

第2図 調査地点位置図

II 天守丸・本丸地点

1. 調査の概要

調査原因 掛川城天守閣復元事業

調査年度 平成元年度・4年度・5年度

調査面積 5,000m²

調査費用 37,174千円（市単独事業）

2. 造構の概要

調査の対象となったのは、天守丸、天守丸に至る登閣路、本丸、本丸虎口部分である。

写真図版の順に概要を説明する。

図版2-1は、天守丸から検出された柱穴や土坑などの遺構。2は本丸から天守丸に至る登閣路で、自然石を使用していて、1.6mから2mほどの幅がある。3は、本丸の下層から検出された中世墳墓群である。

図版2-1は、天守台の石垣である。天守台の標高は56.6m、平野部との比高差約30mを測り、四方の眺望に恵まれている。今回、石垣の解体調査を行ったことにより、山内一豊による天正18年（1590）から慶長元年（1596）の時期の石垣と、江戸時代全般に亘る時期の2種類があることが明らかとなった。これは、地震により崩壊した部分を積み直した結果と考えられる。2は、天守台が載る天守丸から検出された大型の穴である。規模は、長径1.2m～2.1m、深さは1.0m～1.4mを測り、底のほぼ中央に円形の掘り込みがあるという共通点がある。規模と構造から、横列ではなく相当な重量がある構築物の柱穴などを想定している。3は、山内時代と考えられる整地層の下から発見された虎口である。虎口の幅は約70cmで、両側に長径10cm～20cm、深さ20cm～30cmのピットが、40cm～50cmの間隔で並んでいる。4は、天守丸から検出されたS P 39である。長径約1.55m、短径約1.2m、深さ約40cmの穴の中にこぶし大から人頭大の石が詰められていて、石の下の底近くから宝珠文の鬼瓦、土師質のミニチュア羽釜、水滴、小皿などがまとまって出土した。これらの遺物は完全な形であることから、破損品を廃棄したものではなく、意図的に埋納したものとみられ、その時期を16世紀後半と考えている。5は、天守下門の調査地点から検出された礎石と考えられる切石であるが、原位置を保ってはいない。

図版3-1は、登閣路に伴う自然石を組み合わせて作られた側溝で、幅約80cm、深さ約10cmを測る。2は、腰曲輪への通路部分に残る土堀とその基壇となる石垣で、石は3段に積まれていた。土堀には、瓦を積んだ部分が見られた。4は、本丸西端から検出された礎石建物跡である。東西1間（約1.1m）、南北5間（約4.8m）分を検出したが、さらに延びる可能性がある。5は、4の礎石建物跡の西側から発見された掘立柱建物跡で、東西1間（約1.1m）、南北2間（約1.6m）を測る。この建物跡は、次の6の写真中央の溝跡と平行する。6のピットと溝は、本丸西端に存在した土壙に付随する何らかの施設である可能性が高い。

図版4-1は、一辺25cm、厚さ4.5cmの瓦を敷き詰めた、四半敷である。四半敷は、建物の床などに方形の石や瓦、磚などを目地が柱筋に対して45度の方向になるように敷いたものである。四半敷は、東西約3.1m、南北約2.6mの範囲から検出された。部分的な検出であり、全体像は不明であるが、周辺から礎石建物跡が発見されていて、この建物跡に付随する可能性が高い。2は、整地層内に埋めら

れた常滑産の壺である。3は、本丸の整地層の下から発見された15世紀後半から16世紀前半に造られたと考えられる切石を使用した石塔の基壇である。本丸の整地層の下には、12世紀後半から16世紀前半にかけての墳墓群が存在することが明らかとなった。4～6は、本丸門周辺から発見された暗渠である。

図版5-1は、長径1.3m、短径1.2m、深さ95cmの柱穴の底に一辺80cm、厚さ20cmの花崗岩を加工した石が入れられていて、本丸門の柱穴と考えることができる。この柱穴は、16世紀後半以前の朝比奈氏から石川氏段階のものと思われる。2は、本丸門周辺から発見された柱穴とそれを壊す暗渠である。柱穴の主軸は1の柱穴とは異なるものであり、1とは異なる時期と考えられる。3は、三日月堀の西端、十露盤堀から暗渠が入り込む場所から発見されたピットで、木橋等の構築物の柱穴ではないかと考えられる。4～6は、本丸虎口を固める十露盤堀、三日月堀、内堀を繋ぐ暗渠である。

図版6-1は、暗渠内から発見された五輪塔の空輪（宝珠）、風輪（半球）部分である。2は、十露盤堀の縁に積まれた石垣で、長さ8m余り、高さ約1mが残存していた。3は、十露盤堀を遮断するように積まれた、長さ約3.5m、高さ約90cm、2段ほどの石垣である。4は、三日月堀の縁から発見されたピット列で、堀を固むように配置されている。城を守るために施設と考えられる。5は、三日月堀と内堀を繋ぐ暗渠の完掘状況である。6は三日月堀の土層の断面である。三日月堀は、長さ約30m、最大幅約12m、最も深いところで約4.8mを測る。

3. 遺物の概要

図版7-1～4は、天守丸のS P39出土陶器で、この時期のものは、本丸から皿が1枚、三日月堀から皿が2枚出土している。5～10は輸入された青磁・白磁・染付で、計50点が出土しているが、天守丸や天守下門からの出土はわずかで、本丸や堀、堀を繋ぐ暗渠からの出土が圧倒的に多い。11～15の水滴は、三日月堀から出土した。

図版8-1は、内堀と十露盤堀の間から出土した弥生時代中期の壺である。二の丸美術館の建設に伴う発掘調査で、弥生時代中期の方形周溝墓群が確認されていることから、堀のあたりまで方形周溝墓群が存在した可能性が高い。2は、常滑産。3・4は、瀬戸・美濃産である。5のすり鉢は、志戸呂産の可能性がある。6～8はかわらけで、6・8は本丸から、7は十露盤堀から内堀を繋ぐ暗渠から出土した。かわらけは、本丸から多量に出土している。9の天目茶碗は、志戸呂産である。

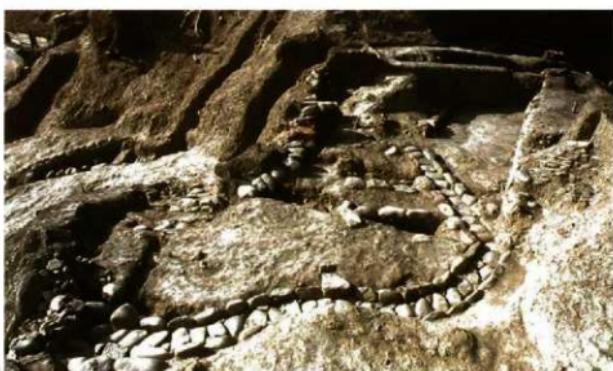
図版9のうち、1～4、7は肥前産、5・6は瀬戸・美濃産で、これらは三日月堀、十露盤堀から出土した。

図版10のうち、1・2・4・5は肥前産の磁器、3・6・7・8は瀬戸・美濃産である。6のすり鉢の内面の上端には④の刻印がある。

図版11-1の涼炉は、底部を除く外側全体に縦軸を掛ける。2は、瀬戸・美濃産である。4・6・7は、天守丸出土で、5は三日月堀出土である。瓶瓦の破片は、本丸からも出土している。

図版12-3の鐵砲玉は本丸虎口の暗渠から、4は本丸門から十露盤堀までの暗渠から出土したものである。重さは、3が約4グラム、4が約10グラムである。5は三日月堀出土。6は内堀出土で、竹管状工具によると考えられる刻印が2つ押されている。7は、三日月堀から出土した火鉢の底部で、内面に「御勅口（定カ）」の墨書きがある。8は、同じく三日月堀出土の鉢類の底部で、外側に「文化十四丁丑 御慶用 十月廿六日」の墨書きがあり、二の丸・三の丸の出入り口である蔵の門の傍らにあった廊部屋で使用されたと考えられる。

図版 1



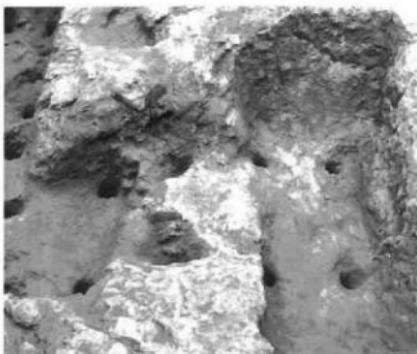
図版 2



1. 天守台の石垣



2. 天守丸の柱穴列



3. 天守丸の虎口



4. 天守丸 SP39



5. 天守下門の礎石



6. 登閣路の階段

図版3



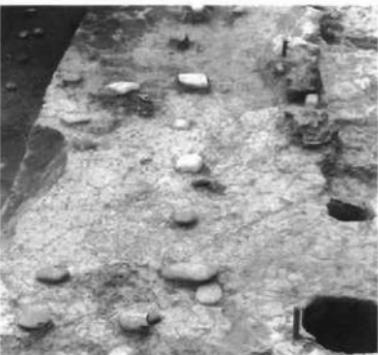
1. 登閣路の側溝



2. 腰曲輪の土塙



3. 腰曲輪の土塙



4. 本丸の建物跡

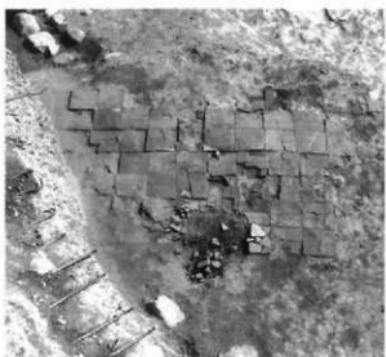


5. 本丸の建物跡



6. 本丸の柵列

図版 4



1. 本丸の四半敷



2. 本丸の埋め廻



3. 本丸下層の中世墓



4. 本丸門周辺の暗渠



5. 本丸門周辺の暗渠



6. 本丸門周辺の暗渠

図版 5



1. 本丸門周辺の柱穴



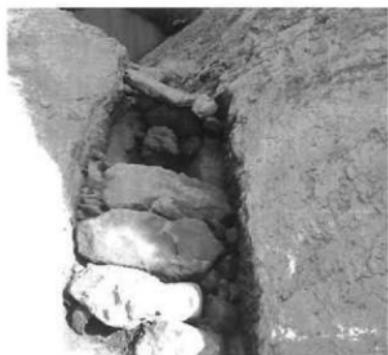
2. 本丸門周辺の柱穴を横す暗渠



3. 十露盤堀と三日月堀を繋ぐ暗渠



4. 十露盤堀と内堀を繋ぐ暗渠

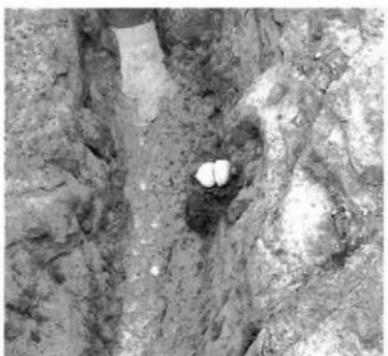


5. 十露盤堀と内堀を繋ぐ暗渠



6. 十露盤堀と内堀を繋ぐ暗渠

図版 6



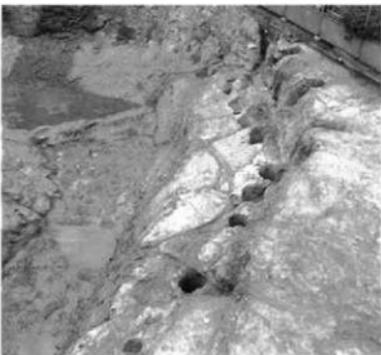
1. 十露盤堀と内堀を繋ぐ暗渠



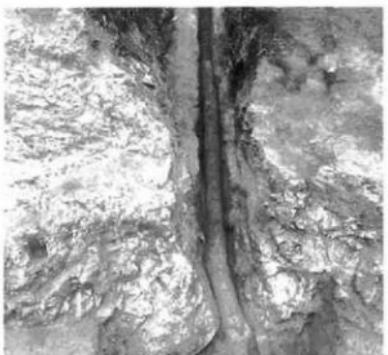
2. 十露盤堀の石垣



3. 十露盤堀内の石積み



4. 三日月堀の縁に並ぶビット



5. 三日月堀と内堀を繋ぐ暗渠



6. 三日月堀の土層断面

図版 7



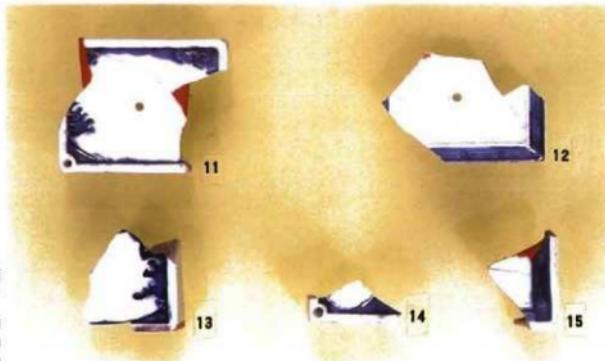
1～4. SP39出土
陶器(16C)

1. 最大径12.4cm
高 6.2cm



5～10. 輸入青磁・
白磁・染付
(15C～16C)

8. 口径9.6cm
高2.6cm



11～15. 水滴
(18C～19C)

11. 幅6.5cm
長8.2cm
高2.8cm

図版 8



1



2

2. 壺 (14C)
口径38.0cm

1. 弥生土器壺 (1C)
最大幅22.0cm 現存高33.3cm



3



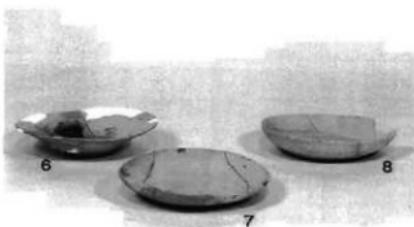
4



5

3・4. 盆 (16C)
4. 口径11.5cm 高2.7cm

5. すり鉢 (17C)
口径28.5cm 高14.9cm



6

7



9

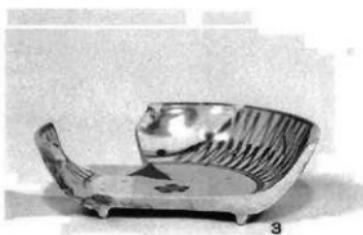
6～8. かわらけ (16C)
7. 口径13.9cm 高2.6cm

9. 天目茶碗 (17C)
口径10.6cm 高7.4cm

図版 9



1. 碗 2. 德利 (17C)
2. 最大径8.6cm 現存高8.6cm



3. 盤 (18C)
口径13.0cm 高4.2cm



4. 盤 (18C)
口径13.8cm 高3.0cm



5. 盤 (18C)
幅7.9cm 高2.1cm



6. 盤 (19C)
口径11.2cm 高2.3cm



7. 蓋物 (19C)
口径9.0cm 現存高1.9cm

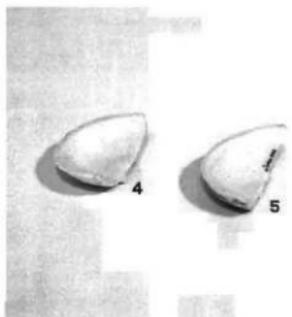
図版 10



1. お神酒徳利 2. 仏飯器 (19C)
1. 最大径5.4cm 現存高9.8cm



3. 皿 (19C)
口径22.2cm 高5.9cm



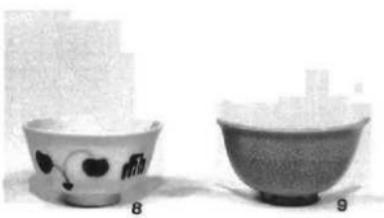
4・5. 紅皿 (18C～19C)
4. 口径6.1cm 高1.7cm



6. すり鉢 (19C)
現存最大径34.0cm 現存高13.8cm

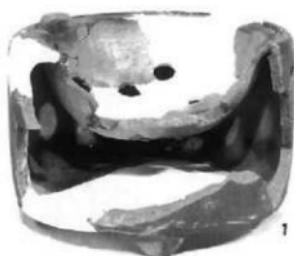


7. 水甕 (19C)
現存最大径20.0cm 現存高12.0cm



8・9. 瓢 (19C)
8. 口径8.2cm 高4.6cm

図版 11



1. 涼炉 (19C)
最大径17.6cm 高12.6cm



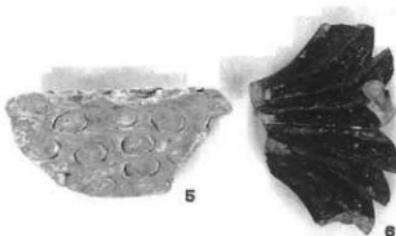
2. 片口鉢 (19C)
口径16.2cm 高10.4cm



3. 宝珠文鬼瓦 (16C)
現存幅33.0cm 現存高26.6cm



4. 鬼面鬼瓦 (16C)
現存高25.0cm



5・6. 蛭瓦 (17C~19C)
5. 現存長19.5cm



7. 三つ葉葵文菊丸瓦 (17C)
径11.1cm

図版 12



1



2



3



4

1. 永楽通宝(15C) 2. 寛永通宝(18C)
2. 直径2.8cm

3・4. 鉄砲玉 (16C～19C)
3. 直径1.0cm 4. 直径1.4cm



5

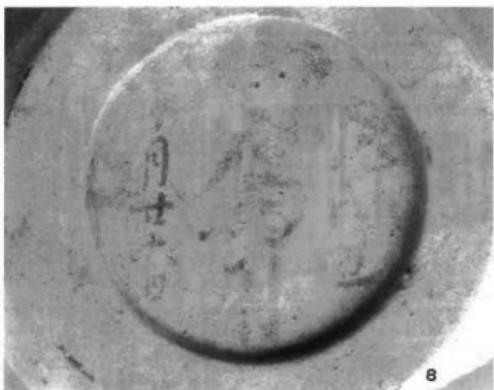


6



7. 墨書 (19C)

5. 焼塙壺(17C～19C) 6. 土錘(16C～19C)
6. 最大径4.1cm 長5.9cm



8. 墨書 (19C)



9

9. 鉄釘 (17C～19C)
現存長13.0cm

III 大手門地点

1. 調査の概要

調査原因 挂川駅北土地区画整理事業

調査年度 平成4年度～6年度

調査面積 1,655m²

調査費用 20,799千円（市単独事業）

2. 遺構の概要

大手門は、嘉永7年（1854）の大地震で倒壊し、安政6年（1859）に再建された。明治維新後に、大手門と大手門番所は民間に払い下げられ、大手門は焼失したが、番所はその後市に寄付された。

調査により大手門の礎石を支える根固め石が入る柱穴が、全部で12個検出された。柱穴間の距離を基に門の規模を推定すると、桁行約12.7m、梁間約5.5mとなる。

図版13-1は、大手門跡と番所跡を城外から見た風景である。2は、番所とその側面から背面に延びる土塙の基礎の石垣である。3は、門の扉口部分の地覆石と礎石の根固め石である。地覆石は、幅16cm、長さ32cmの切石と、幅17cm、長さ34cmの切石の2枚を並べたものである。

図版14-1は礎石根固めで、中央に約60cm×約40cmの自然石があり、その下に長さ35cm前後の石を中心円状に並べたものである。2は、同じく柱穴であるが、礎石を支えるための根固め石はほとんど抜き取られていた。柱穴は、直径約1.9m、深さ約1.5mで、埋め戻された土には竹の皮や木の皮、板きれなどが多量に混じっていた。3は、門の屋根から落ちる雨を受けるための北側の雨落溝で、幅約55cm、深さ約10cm、石に混じり瓦が多量に出土した。門の前面の雨落溝とその周辺からは、門に使用されていたと考えられる釘や鉢などが漆喰の破片とともに出土した。4は、門の北側の雨落溝と番所の間から検出された瓦敷きである。幅60cm～70cm、長さ約3.3mに亘り、厚さ約10cmの整地層の上に瓦が敷かれていた。5・6は土塙の石垣で、門の西側から背面にかけてL字状に検出された。石垣は、50cm～70cmの大石が使用され、1段から2段が残っていた。石垣の裏側には、石の裏側のすき間に埋めて石を安定させるとともに、排水を容易にするための裏込め石が存在した。石垣の下からは、石垣の陥没を防止するための胴木が発見されている。胴木は、一辺約30cm、長さ約3mの角材で、杭と小石で固定されていた。

3. 遺物の概要

図版15-1は、平安時代の綠釉陶器の底部の破片である。綠釉陶器は、主に当時の役所や寺院から発見されるもので、市内の遺跡では、原川遺跡、梅橋北遺跡、原遺跡に次いで4遺跡目の発見であり、掛川域内からは、市立第一小学校、中央図書館の調査地点からも出土している。2・3は、志戸呂産の灰釉瓶子の破片である。4・5は、16世紀後半に位置づけられる内禿皿である。6は志戸呂産の丸碗で、18世紀前半と考えられる。7は、志戸呂産の大型の皿。8は、瀬戸・美濃産の御室茶碗で、18世紀後半と考えられる。

図版16-1・2は、18世紀後半から19世紀前半と考えられる肥前磁器である。3は、18世紀代に位置づけられる肥前産の磁器で、内面に橙色の付着物が残り、紅皿の可能性がある。4は、外面にコウモリを描く肥前産磁器で、19世紀前半に位置づけられる。5は、し瓶で19世紀に位置づけられる。

図版 13



1. 大手門跡



2. 番所跡と土塙
石垣



3. 大扉地覆石と
礎石根固め石

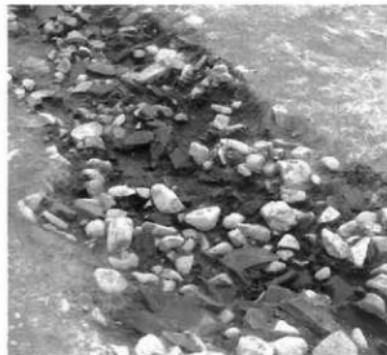
図版 14



1. 磨石根固め 5



2. 磨石根固め 8



3. 雨落ち溝内の瓦



4. 瓦敷き



5. 土壙石垣の基礎

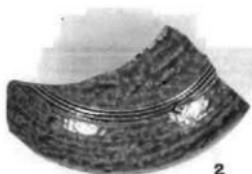


6. 土壙石垣の構造

図版 15



1



2



3

1. 緑釉陶器 (10C)
高台径5.2cm

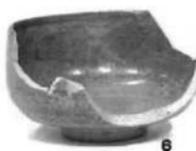
2・3. 灰釉瓶子 (15C)
高台径9.7cm



4



5



6

4・5. 盆 (16C)
4. 口径10.4cm 高2.2cm

6. 碗 (18C)
口径9.4cm 高5.6cm



7



8

7. 深皿 (17C)
口径29.6cm 高8.3cm

8. 碗 (18C)
口径10.0cm 高6.6cm

図版 16



1



2



3

1・2. 碗蓋 (18C~19C)
1. 口径8.8cm 高2.6cm

3. 盆 (18C)
口径6.8cm 高2.9cm



4

4. 碗 (19C)
4. 口径9.2cm 高4.9cm



5

5. し瓶 (19C)
最大幅16.9cm 現存高14.3cm



6



7

6. 鉤 7. 銛 (17C~19C)
6. 長20.1cm



8

8・9. 銛と座金 (17C~19C)
8. 現存長9.1cm

IV 山下郭(1) 地点

1. 調査の概要

調査原因 市立第一小学校プール改築事業
調査年度 平成7年度
調査面積 1,350m²
調査費用 15,138千円（市単独事業）

2. 遺構の概要

本調査地点からは、柱穴列、池状遺構、井戸などが検出された。

図版18-1は、約2mの間隔において4つの柱穴が直線上に並ぶものであるが、建物として抽出できるものではない。2～4は、柱穴の状況を示す写真である。2は、直径約35cmの柱穴内に直径約10cmの柱根が残るものであるが、出土遺物がないので、時期を特定できない。3は、一辺約70cmの正方形の柱穴の中央に、直径約50cmの円形に石を敷いたものである。石の大きさは、10cmに満たないものから20cm前後のものまであり、2段に積まれていた。出土遺物がなく、時期は不明である。4は、直径約50cmの円形の柱穴の底の中央に、底辺の長さ約20cm、高さ約25cmほどの三角形の石を置いて柱を据えるようにしたものである。石の下に潜り込むような状態で朱漆塗りの椀が出土していて、江戸時代に位置づけることができる。5と図版19-1は、池状遺構S X01である。S X01は、東西約7.4m、南北約3.4mの大きさで、調査区外に及んでいる。深さは75cmほどである。堆積した土の上層に、木の皮、草、竹等が混入する層がある。池の縁に沿って、幅20cmほどの石が一列に敷き詰められている。6のS E01は、直径約90cm、確認面からの深さ約2.2mを測る石組みの井戸で、出土遺物から、19世紀代に位置づけられる。

図版19-2は、約2.5mの長さに亘り石をほぼ一列に並べたもので、暗渠の可能性がある。時期は、江戸時代後期から明治時代に及ぶ可能性がある。3は、井戸跡と考えられる遺構S P547で、1.65m×1.95mの楕円形を呈し、確認面からの深さ約1.5mを測る。素掘りで、15世紀代と考えられる。4は井戸跡と考えられる遺構S X07で、直径約1.4mの円形で、深さ約1.4m、底の四隅に約60cmの間隔において、一辺約20cm～25cm、深さ約10cmの四角い穴がある。時期は、16世紀代に位置づけられる。5のS X04は、幅約1.3m、長さ約2.6mの隅の丸い長方形を呈し、深さは約90cmを測る。S X01の下から確認されたことから、18世紀前半以前に位置づけることができる。6は、直径約60cmの穴の中に木の桶を埋設したもので、出土遺物から明治時代以降と考えられる。

図版20-1は、江戸時代前半の遺構S P522（左上）と江戸時代後半と考えられる遺構S P521である。S P522は、東西約75cm、南北約1mの長方形の穴を掘り、壁面に板を当てて、四隅に杭を打ち込んで板を留めている。確認面からの深さ約80cmを測る。S P521は、東西約1.65m、南北約1.3mの長方形の穴に、東西約55cm、南北約1.25mと、東西約65cm、南北約1.25mの長方形の区画を設けたものである。壁面には板が当てられていて、杭で板を押さえている可能性がある。2と3は、19世紀前半に位置づけられる遺構S P1179である。東西約60cm、南北約80cmの長方形の穴の東壁面、西壁面、南壁面に土留めのための横木を渡して、横木を押さえるために直径約5cmの杭を打ち込んだもので、深さは23cmを測る。この穴の中からは、長さ5cm～10cmの石が敷き詰められた状態で検出され、中央北寄りから、すり鉢の底部が出土した。4は、19世紀の遺構S P1187で、東西・南北ともに長さ約80cm、

幅約25cmの十字形の穴が掘られていて、そこに太さ約5cm、長さ約70cmの丸太杭を交差させて入れていた。穴の中からは、10cm程度の大きさの石が30個ほど検出された。5は、図版22-7の壺を含む弥生時代後期の土器の出土状況である。6は、時期不明の木製品の出土状況である。

3. 遺物の概要

本地点では、弥生時代から江戸時代までの様々な遺物が出土している。

図版21-1~4は、平安時代の縁釉陶器の皿の破片で、1・2・4には、花文の陰刻が施される。5は、江戸時代の朱漆塗りの椀で、内面に黒漆で一重網目文を描く。6・7は、志戸呂産の壺である。

図版22-24-3までが、弥生時代から平安時代までの遺物である。1・2は、弥生時代中期の壺の口縁部から頸部の破片。3~5は弥生時代中期の磨製石斧で、3が扁平片刃石斧、4・5が柱状片刃石斧である。このほかに大型蛤刃石斧が出土していて、このように弥生時代中期の石斧がまとまって出土したのは、市内初である。6は、弥生時代後期の壺の頸部の内面にヘラ状の工具で線刻をしたものである。7は、同じ時期の大型の壺の底部から体部の破片で著しく変形していて、焼成時に高熱により変形した可能性がある。

図版23-1・2は、祭祀に使用されたと考えられるミニチュア土製品で、1は須恵器の横瓶を、2は、壺か壺を模したものと考えられる。3は須恵器横瓶、4は須恵器壺、5~7は、須恵器壺蓋である。8は、7世紀末から8世紀初めに位置づけられる三重弧文の軒平瓦である。東山口に所在した諏訪瓦窯がこの時期と考えられる可能性があるが、確実にこの時期に位置づけられる瓦は市内初である。周辺にこの時期の寺院か役所が存在した可能性がある。9・11は、奈良時代の須恵器壺身、10は須恵器壺蓋で、この時代の須恵器は、他に鉢と四耳壺と思われる破片があるだけで、器種のバラエティーはきわめて少ないと言える。12は、壺に付く足で、形状から獸足と呼ばれるものである。灰釉陶器で、足の指の表現はなく、かなり簡略化されている。

図版24-1・3は、灰釉陶器の皿、2は灰釉陶器の碗である。2は、内面・外表面のすべてに釉を刷毛塗りしている。4~6、10・11は、輸入磁器である。輸入磁器は、破片で25点ほど出土している。7は、瀬戸・美濃産の香炉、8・9は、細江町の初山産の皿である。12・13は、大型のかわらけである。

図版25-1・2は、瀬戸・美濃産の皿、3は志戸呂産の水滴である。3の水滴と同じ時期の遺物に、水指または建水と思われる陶器片がある。4・5は志野、6は灯明用のかわらけ、7・8・9は、瀬戸・美濃産の陶器である。6と8は、池状造構S X01からの出土である。

図版26~28-1までは、18世紀から19世紀に位置づけられる陶器・磁器である。図版26-1、3~6は肥前産磁器、2・9は瀬戸産で、9は新七窯の製品と考えられる。7・8は、志戸呂産である。

図版27-1・2は京焼風で、松葉を描く。4は肥前産磁器で、それ以外は瀬戸・美濃産である。

図版28-2は、大型のかきたてと考えられる。3・4は渡来銭で、3は北宋の皇宋通宝(1038年初鋤)、4は明の洪武通宝(1368年初鋤)である。渡来銭はこのほかに、北宋の咸平元宝(998年)、景德元宝(1004)、天祐通宝(1017)、嘉祐元宝(1056)、熙寧元宝(1068)、元祐通宝(1086)、大觀通宝(1107)、政和通宝(1111)、明の永樂通宝(1408)がある。5は新寛永、6は、寛永通宝四文銭(1768年~)である。7は作業用の小刀で、刃がやせ細りかなり使用されたことがわかる。8のキセル彫首は、肩付で断面が六角形を呈する。金属器はほかに、小柄の柄がある。

文字資料には、陶器に墨書きされた「主」、「千」か「中」、「□七郎」等がある。

図版 17



1. 柱穴列

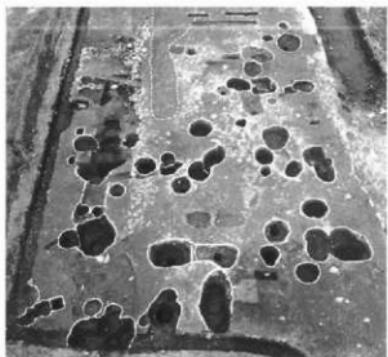


2. 上層の遺構



3. 下層の遺構

図版 18



1. 柱穴列



2. 柱根



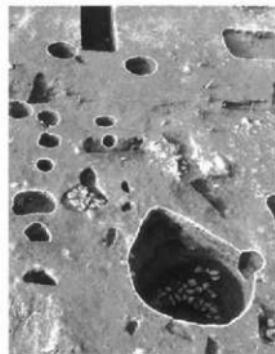
3. 根固め石



4. 根固め石

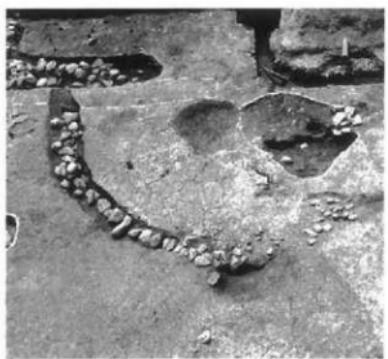


5. SX01



6. SE01

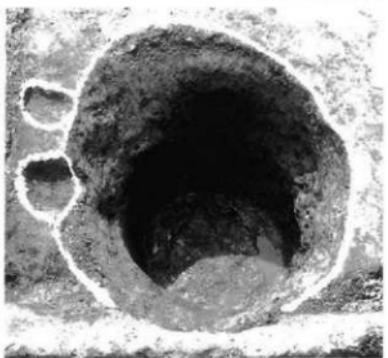
図版 19



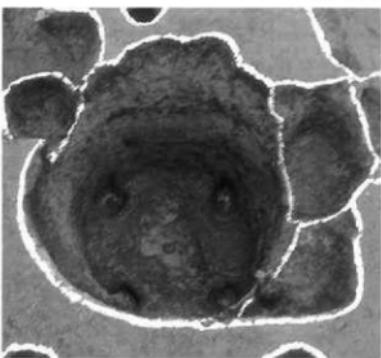
1. SX01を囲む石列



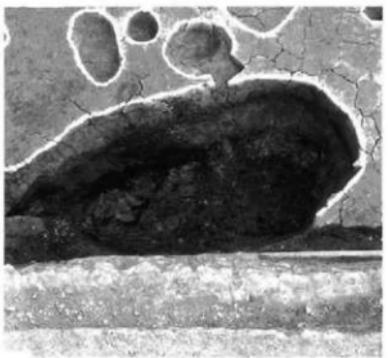
2. 石列



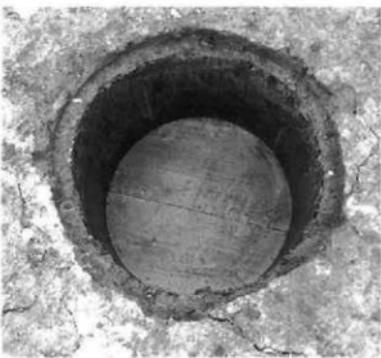
3. SP547



4. SX07

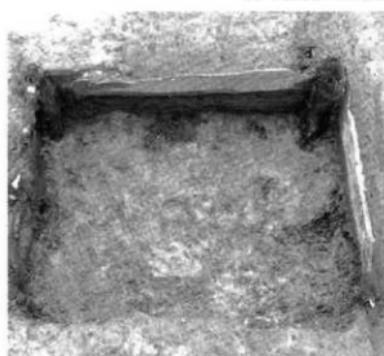
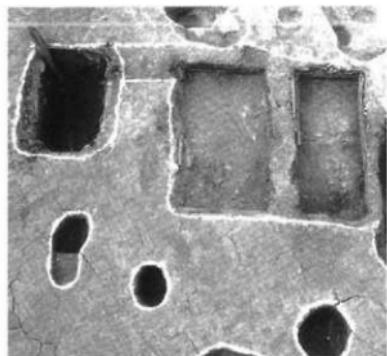


5. SX04



6. SP02

図版 20



図版 21



1～4. 緑釉陶器
(9C～10C)



5. 漆塗り椀
(17C～19C)
口径11.5cm
高3.8cm



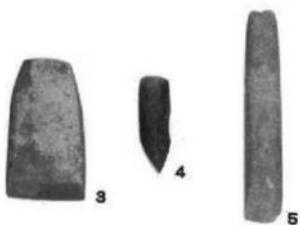
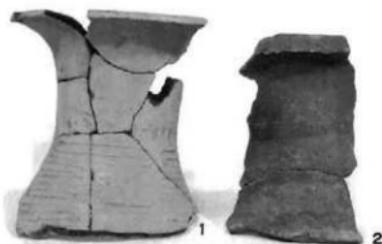
6



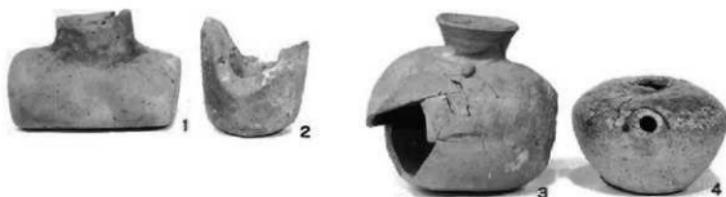
7

6・7. 志戸呂産甕
(19C)
6. 口径10.9cm
高20.0cm

図版 22



図版 23



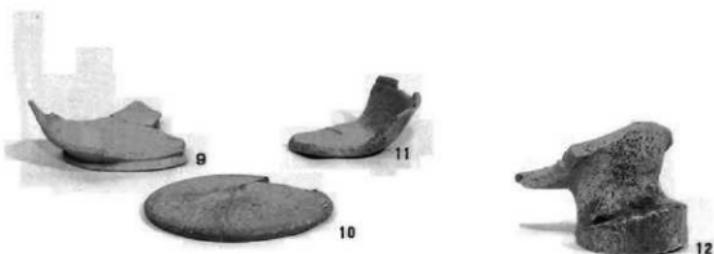
1・2. 土製品 (7 C)
1. 幅7.7cm 高5.4cm

3・4. 須恵器 (7 C)
3. 幅13.6cm 高12.7cm



5～7. 須恵器 (7 C)
6. 口径15.4cm 高3.8cm

8. 軒平瓦 (8 C)
現存幅8.4cm 高3.9cm



9～11. 須恵器 (8 C)
11. 口径13.2cm 高4.4cm

12. 獣足 (9 C)
現存高5.7cm

図版 24



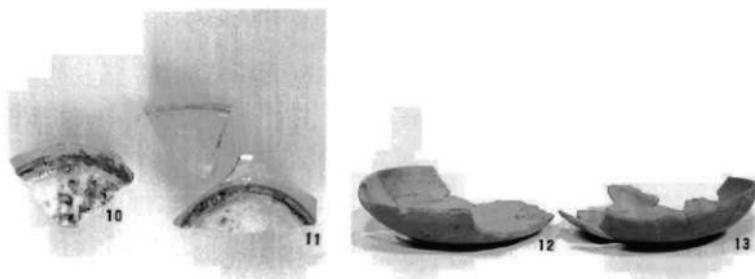
1～3. 灰釉陶器 (9C～10C)
3. 口径15.0cm 高3.4cm

4～6. 青磁 (14C～16C)



7. 香炉 (15C)
口径12.0cm 高6.5cm

8・9. 盘 (16C)
8. 口径10.5cm 高1.9cm



10・11. 白磁 (16C)

12・13. かわらけ (15C～16C)
12. 口径19.0cm 高4.3cm

図版 25



1・2. 盆 (16C)

2. 口径9.9cm 高2.3cm

3. 水滴 (17C)

最大径8.0cm 高5.5cm



4

5

6

4. 鉢 5. 盆 (17C)

5. 口径13.6cm 高3.9cm

6. かわらけ (18C)

口径8.8cm 高2.8cm



7



8



9

7. 天目茶碗 (18C)

口径11.4cm 高5.8cm

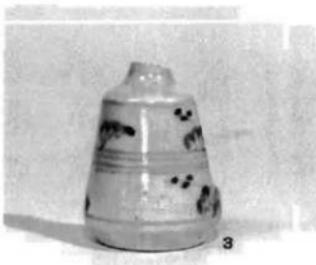
8・9. 碗 (18C)

8. 口径10.4cm 高4.8cm

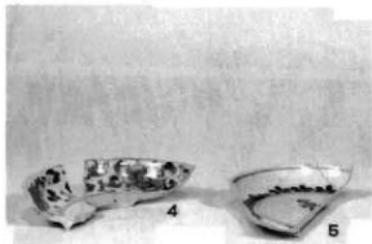
図版 26



1. 碗 (18C) 2. 油壺 (19C)
1. 口径9.6cm 高4.9cm



3. 振出 (18C~19C)
最大径4.7cm 現存高6.2cm



4・5. 盘 (18C)
5. 口径13.4cm 高2.9cm



6. 盘 (18C)
口径12.8cm 高2.6cm



7・8. 鉢 (19C)
8. 口径6.9cm 高4.0cm

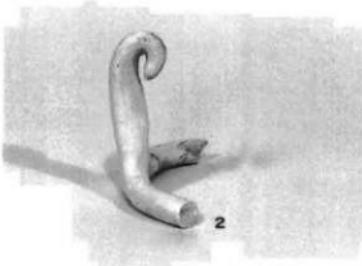
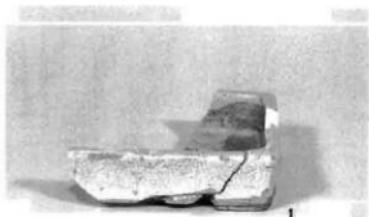


9. 手水鉢 (19C)
口径30.5cm 高15.7cm

図版 27



図版 28



1. 植木鉢 (19C)
現存長14.7cm 高4.7cm

2. かきたて (19C)
直径12.6cm 高8.0cm



3



4



5



6

3. 皇宋通宝 (11C) 4. 洪武通宝 (14C)
3. 直径2.5cm

5. 寛永通宝 (17C) 6. 寛永通宝 (18C)
6. 直径2.8cm



7



8

7. 小刀 (16C～19C)
全長22.5cm 刃渡15.0cm

8. キセル雁首 (18C ?)
全長4.5cm

V 二の丸地点

1. 調査の概要

調査原因 市立二の丸美術館建設事業

調査年度 平成7年度・8年度

調査面積 2,000m²

調査費用 17,879千円（市単独事業）

2. 遺構の概要

重要文化財の御殿が建つ二の丸は、正保城絵図には三の丸と記載されていて、三の丸が二の丸と記載されていることから、初期の段階の掛川城では、後の二の丸はまだ御殿などが建てられるような形では用いられておらず、後の三の丸に二の丸の政庁が置かれていたとされる。

調査により、建物跡、堀、井戸、溝状遺構などが発見された。

図版30-1・3・4は、明治時代以降の建物の基礎である。2・5・6と図版31-1~4は、二の丸御殿の勝手台所跡から検出された柱穴である。勝手台所は、養生の公邸であった小書院棟の北側にあった建物であるが、明治時代以降に取り壇された。今回の調査では、建物の礎石を支える礎石根固めが検出され、その配置は安政年間（1854~1859）に描かれた御殿の絵図と一致している。礎石根固めは、直径約90cm、深さ約60cmの穴の中にこぶし大の石と粘土を交互に積み重ねて作られたものと想定される。礎石根固め以外にも、台所にあった竈などの跡も発見された。御殿の礎石根固めは、旧地形の上に50cmほど盛り土を施した上に存在した。この盛り土をはずすと、下から弥生時代の方形周溝墓、平安時代の土坑、鎌倉時代の土坑、室町時代の溝などの遺構が現れた。このことから、御殿建設に伴う造成は、自然地形の高い所を削り、低い場所を埋めた程度であったのではないかと考えている。

弥生時代の方形周溝墓は5基検出されたが、規模のわかるものはそのうちの1基で、方台部の大きさは、東西約9m、南北約8mを測る。方台部を囲む溝は4隅が切れるもので、幅は約2m、深さ約40cmである。溝内からは、お供えにされた壺が発見された。平安時代の土坑S P 326は、擾乱により破壊されているが、幅約80cm、長さは現存で約80cm、深さ約20cmで、この土坑から図版34-2の八稜鏡が出土した。

図版31-5は、調査区西端で検出された箱堀で、幅は南端で約5m、北端で約3m、深さは約1.4mを測る。堀の底から確認面にかけておびただしい量の瓦が出土した。瓦に陶磁器や石が混じる。堆積した上の観察から最低でも2回の瓦の大規模な投棄があったことがわかる。6のS D01は、南から北に傾斜する溝で、調査区北端で幅約2.8m、深さ約1.7mを測る。覆土中から、古墳時代後期の土師器が出土した。

図版32-1は、二の丸御殿に伴う井戸S E01である。このS E01は、内部の調査をせずにそのまま保存されている。2は、江戸時代の前半に使用されていたと考えられる井戸S E03である。この井戸は、直徑約2.4m、深さ約3mの規模で、底の周囲の半分に長さ約30cm、幅約20cmの石が12個並べられていた。井戸内からは、灯明用に使われたかわらけや墨書きのあるかわらけの破片、丸瓦・半瓦の破片などが出上している。井戸は、もう1基素掘りのものが検出されている。この井戸からは、14世紀に

位置づけられる図版33-1の鉄軸広口壺の破片や16世紀代の図版34-6の香炉が出土している。3は、16世紀後半の溝状遺構SD03の遺物出土状況である。SD03は、南から北に傾斜する溝で、ゆるく湾曲している。幅約1.8m、深さは南端で約30cm、北端で約40cmである。長さ約15m分を確認した。4は、17世紀の土坑SF01内の瓦・かわらけの出土状況である。SF01は、幅約1.2m、長さ約1.6mの長方形で深さ約30cmである。5は、明治時代以降の建物の石詰めの基礎の石の下から図版33-9の16世紀の染付碗が出土した状況である。6は、18世紀後半から19世紀にかけての遺構SX03の遺物出土状況で、中央に見えるのは図版35-7の徳利である。

3. 遺物の概要

出土遺物には、弥生時代中期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、鎌倉時代以降の陶器・磁器、江戸時代の瓦類・錢貨・キセル雁首・獸骨・木製品などがある。

図版33-2～5は、14世紀から15世紀に位置づけられる輸入青磁、6・7は14世紀から16世紀にかけての輸入白磁、8・9は16世紀の輸入染付である。青磁・白磁・染付はほとんどが細片で、その総点数は70点近くにのぼる。一部は、柱穴から出土しているが、大半は江戸時代以降の遺構や掘削中に出土した。10は箱堀出土、11はSF01出土である。

図版34-1の弥生時代中期の壺は、方形周溝墓の周溝から出土したもので、赤彩が施される。2は、SP326から出土した八稜鏡で、鏡が全面を覆っていて、鏡式は不明である。3・4は、鎌倉時代の陶器で、この時期の陶器は土坑SF03から集中して出土していて、他は箱堀に少量混入する程度である。5の常滑の壺は、溝状遺構SD03からの出土で、このSD03からは、常滑の壺の破片や7のすり鉢も出土している。

図版35-1～5は、SF01から出土した。1・2は、口縁部の内外面に煤がべつとりと付着したかわらけで、灯火用に用いられたと考えられる。同じかわらけでも4・5のかわらけには、煤が付着していない。この煤が付着していないかわらけが、SE03からまとめて出土している。3は、肥前産の磁器と考えられる。6は、遺構を確認する段階で出土した肥前産磁器の皿である。7と図版36-4～8は、SX03から出土した。7は志戸呂産の徳利で、「佐野傳」、反対側に「雀」という屋号を書き入れた後に焼成したものである。容量は、1升(約1.8リットル)と考えられる。8は、肥前産の磁器である。

図版36-1は、瀬戸・美濃産の陶器で、2・3は、肥前産磁器の碗である。6・7は、煎茶碗と考えられる。この手の煎茶碗は、箱堀から出土している。8は灰落として、キセルを打ち付けたことにより、口縁が欠けている。外面の3分の1と口縁部内面に緑釉をかける。

図版37-1は、確認面から出土した香合、2は、確認面から出土した焼塩壺の蓋である。3～6は、箱堀から出土した城主の家紋のついた瓦で、3は井伊氏、4は小笠原氏、5・6は太田氏である。このほかに箱堀からは、北条氏の家紋の軒丸瓦、太田氏の家紋の鳥衾、巴文の軒丸瓦、軒平瓦、軒棟瓦、棟瓦、堀用棟瓦、鬼瓦など多種多様な瓦が出土した。

図版38-1・2は、SP159から出土した天保通宝で、SP159からはこのほかに銭文不明の錢貨が1枚出土している。これらの錢貨は、柱穴の壁面にまとめて入れられていたことから建物に関する埋納錢と考えられる。3のキセルの雁首は、整地層から出土した。4～12は、SE03から出土したものである。鹿角は、中央図書館建設に伴う調査においても出土している。

図版 29



1. 一面目全景



2. 堀の中に廃棄された瓦

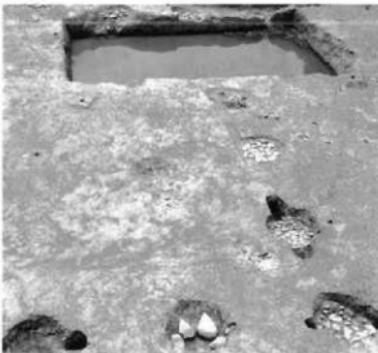


3. 完成全景

図版 30



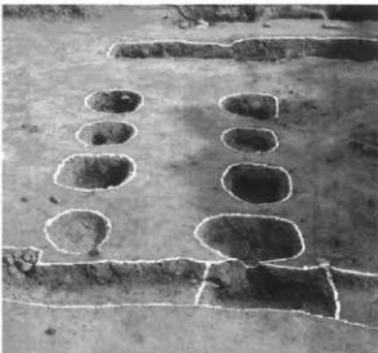
1. 碓詰めの建物基礎



2. 磨石根固め



3. 磨石根固め



4. 磨石根固め除去後



5. 磨石根固め SN07



6. 磨石根固め SN08

図版 31



1. 磂石根固め SN09



2. 磂石根固め SN10



3. 磂石根固め SN34



4. 磂石根固め SN42

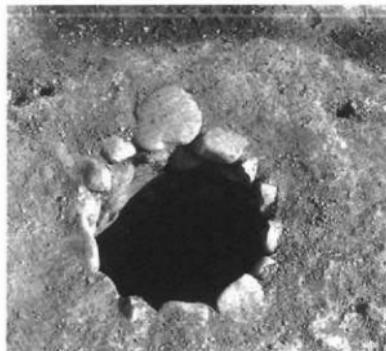


5. 堀検出状況

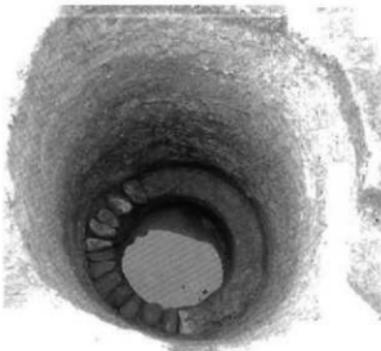


6. SD01

図版 32



1. SE01



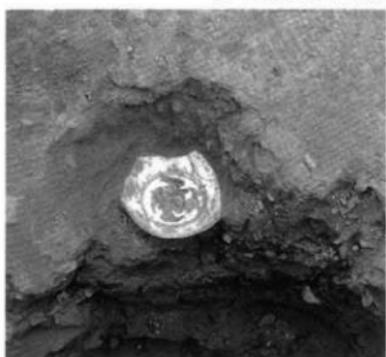
2. SE03



3. SD03遺物出土状況



4. SF01遺物出土状況



5. SR05遺物出土状況



6. SX03遺物出土状況

図版 33



1. 鉄軸広口壺
(14C)



2～9.
輸入青磁・白磁・染付
(14C～16C)

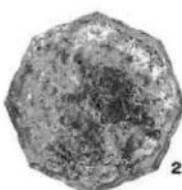


10. 染付鉢(18C)
11. 染付皿(17C)
10. 口径14.2cm
高 4.0cm
11. 口径21.4cm
高 3.5cm

図版 34



1



2

1. 弥生土器壺 (BC 1 C)
現存高16.4cm

2. 八稜鏡 (9 C)
径8.8cm 高0.4cm



3



4



5

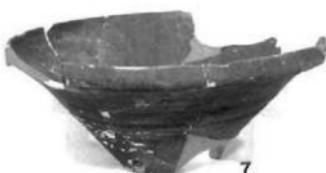
3・4. 山茶碗 (13C)
3. 口径14.0cm 高5.6cm

5. 壺 (16C)
最大径22.6cm 現存高14.1cm



6

6. 香炉 (16C)
口径10.3cm 高6.2cm



7

7. すり鉢 (16C)
口径27.7cm 現存高11.3cm

図版 35



1・2. かわらけ (17C)
1. 口径12.4cm 高3.7cm

3. 碗 (17C)
口径12.2cm 高7.3cm

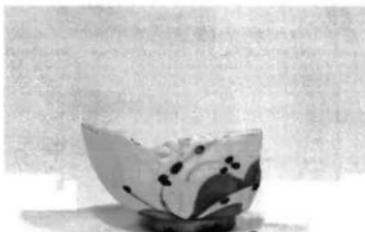


4・5. かわらけ (17C)
4. 口径12.4cm 高3.3cm

6. 碗 (18C)



7. 德利 (18C)
最大径14.1cm 高26.0cm



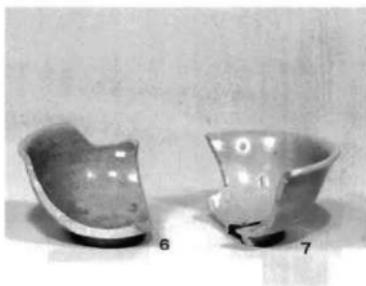
8. 碗 (18C)
口径9.6cm 高5.0cm

図版 36



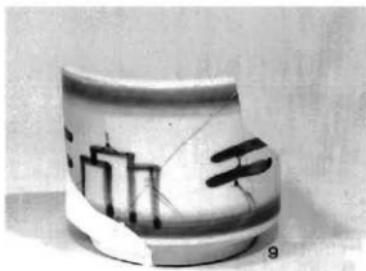
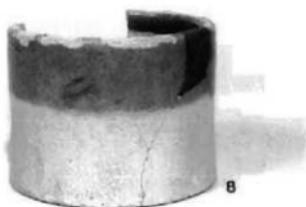
1. 碗 (19C)
口径10.0cm 高5.8cm

2・3. 碗 (19C)
2. 口径9.4cm 高5.5cm



4・5. 碗 (19C)
4. 口径9.6cm 高5.4cm

6・7. 碗 (19C)
6. 口径8.8cm 高4.7cm



8. 灰落し (19C)
口径12.0cm 高9.4cm

9. 火入れ (19C)
口径10.4cm 高9.0cm

図版 37



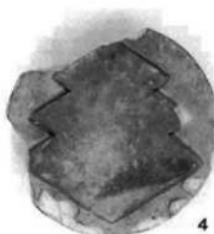
1. 番合 (18C~19C)
最大径5.4cm 高1.5cm



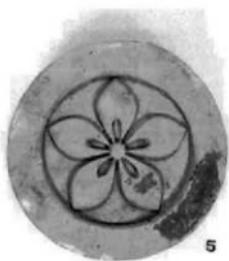
2. 焼塙壺の蓋 (17C~19C)
直径8.2cm 高2.1cm



3. 井伊家紋軒丸瓦 (17C)
直径15.8cm



4. 小笠原家紋軒丸瓦 (18C)
直径15.6cm



5. 太田家紋軒丸瓦 (18C~19C)
直径15.7cm



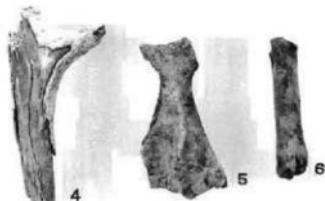
6. 太田家紋鬼瓦 (18C~19C)
高30.1cm

図版 38



1・2. 天保通宝 (19C)
1. 長5.0cm 幅3.3cm

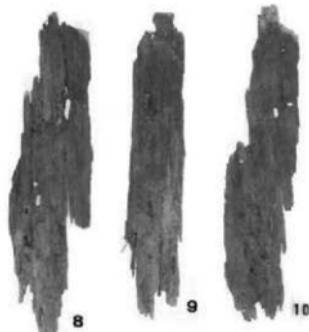
3. キセル雁首 (19C)
全長7.5cm



4. 鹿角 5・6. 獣骨 (16C～18C)
4. 現存長12.7cm



7. 木製品 (16C～18C)
全長18.7cm



8～10. 建築材 (16C～18C)
9. 現存長28.8cm 厚0.7cm



11. 木板 12. 木杭 (16C～18C)
12. 現存長26.5cm 直径3.2cm

VI 山下郭(2) 地点

1. 調査の概要

調査地点 市立中央図書館建設事業

調査年度 平成10年度・11年度

調査面積 5,000m²

調査費用 30,129千円（市単独事業）

2. 遺構の概要

この地点は、大手門から天守・本丸等の城の中核にいたる道筋にあたり、藩の上級武士の邸宅になっていたところである。標高は、二の丸より4mから5m低くなっている。

調査地点の南端は、弥生時代から鎌倉時代の遺物を含む黒褐色土が最大で約1.3mの厚さで堆積していた。この黒褐色土の上に、戦国時代から16世紀代と考えられる整地層が約50cmの厚さで存在し、さらにその上に江戸時代の整地層が30cm～40cmの厚さで存在する。また、調査地点の北西隅にも、弥生時代から古墳時代の遺物を含む黒灰色土・黒褐色土が堆積し、その上に整地層が存在した。

調査により、掘立柱建物跡6、柵列2、井戸跡23、溝跡などが発見された。

図版40-1・2は、掘立柱建物跡S B06の柱穴で、礎板が使用されている。S B06は、東西1間（約1.6m）、南北2間（約4m）の掘立柱建物で、東西・南北ともに延びる可能性がある。柱穴内からは、鎌倉時代の山茶碗が出土している。3のS F27は、掘立柱建物跡S B01の柱穴である。S B01は、東西5間（約10m）、南北3間（約6m）で、面積約60m²である。S F27は、1.2m×1mの長方形の穴の片隅に直径約70cmの一段深く掘り込まれた部分があり、ここに直径20cmほどの空間を残し、石が詰められていた。柱穴の中に棟瓦が混入することから、江戸時代後半以降の建物と考えられる。このほかの掘立柱建物は、東西2間（約2.7m）、南北2間（約2m）の安土桃山以前と考えられるS B02、東西1間（約2.1m）、南北1間（約1.8m）の鎌倉時代以降と考えられるS B03、東西2間（約4m）、南北1間（約1.6m）以上の規模で、時期不明のS B04、東西5間（約9.7m）、南北3間（約6m）で19世紀以前と考えられるS B05がある。4のS F05は、柵列S A02の柱穴である。S A02は、S B01の北に約2.7mの間隔をおいて平行に走る8間（約14.4m）の柵列である。柱穴は、直径60cm前後の大きさであるが、S F05は、1.2m×1.6mの梢円形で、底に10cm～30cmの大きさの石を入れていて、規模・構造の点において他の柱穴に比べ異質である。時期は、18世紀後半から19世紀と考えられる。5は、素掘りの井戸S F78である。一辺約80cmの正方形で、深さ約1.8m、14世紀から15世紀に位置づけられる。6は、素掘りの井戸S E11で、直径約1.4m、深さ約5.1mを測り、15世紀に位置づけられる。

図版41-1は、石組み井戸S E04で、直径約1.3m、深さ約3mを測り、16世紀後半に位置づけられる。2は石組み井戸S E12で、直径約70cm、深さ約3mを測り、18世紀から19世紀に位置づけられる。3は、石組み井戸S E13の石を取り除いた後の写真である。直径約1.1m、深さ約3.6mを測り、18世紀から19世紀に位置づけられる。4は、石組み井戸S E06の石を取り除いた後の写真である。直径約1.2m、深さ約2.6mを測り、19世紀前半に位置づけられる。5は、19世紀の土坑S F60である。6は、直径約40cm、深さ約10cmの穴の底に、直径約3cmの底板を入れたもので、底板の中央には、直径約6cmの穴があけられている。時期・性格の決め手はない。

今回の調査地点の特色は、検出された井戸の数の多さである。素掘りの井戸13、石組み井戸9、木の桶を利用したもの1の合計23が検出された。

溝状遺構は、16世紀後半のS D06・S D12がある。S D06は、幅約2m、深さ約65cm、長さ6m分を検出した。S D12は、幅約2.5m、深さ約1m、長さ8m分を検出した。S D06とS D12で、環濠状になる可能性がある。

図版42-1の石列2は、長さ約2.1mに亘って石をほぼ一列に敷いたものであるが、石の上端は水平ではない。S B01の柱穴間に位置していて、S B01に関連するものと考えられる。2~6は、遺構内における遺物等の出土状況を示す写真で、2は16世紀後半の遺構S X01、3は、16世紀後半から18世紀に及ぶ遺物が出土したS F01、4~6は、19世紀に位置づけられる遺構の状況である。

3. 遺物の概要

図版43-1は奈良時代の二彩片で、高台径4cmを測り、小壺の底部の可能性がある。奈良時代の二彩・三彩の出土は県内5例目で、市内では六ノ坪遺跡に次いで2例目である。3は平安時代の綠釉陶器で、形から瓶類の底部と考えられる。4~6は、整地層から出土した。7・8は、遺構外から出土した肥前産の磁器である。

図版44-1は瀬戸産の灰釉瓶子の破片で、牡丹文が表現される。2、7~9は、輸入磁器である。3・4・6は瀬戸・美濃産、5は志戸呂産である。

図版45のうち、1・2はS D12、4・5・7はS F01、6はS E04出土である。8~10の灯明に使用されたと考えられるかわらけのうち、8・10は、S E07から出土した。

図版46-1・4は志戸呂産、2・3・5・6は、瀬戸・美濃産の陶器である。6は、底部に故意に穴があけられていることから、小児用の骨壺の可能性がある。7・8は、肥前産の磁器である。

図版47の1・2・5・6・9は肥前産の磁器、3・7は志戸呂産、4・8・10は、瀬戸・美濃産と考えられる。図版47の9・10、図版48の1~3は、S X22出土である。

図版48-1・3・5は瀬戸・美濃産、2・4が肥前産磁器、6は信楽焼、7は志戸呂産と考えられる。4・5はS F15、6・7はS X10出土である。

図版49-1・2・5は産地不明、3・4は瀬戸・美濃産である。5の風炉は、黒漆の痕跡と考えられる黒斑が全体に残る。

図版50-1のかわらけには、密教で使用される法具のような絵が墨で描かれていて、宗教に関係すると考えられる。その他にかわらけに墨書きされたもので宗教に関連すると考えられるものは、「□□寺十三佛 三二回□」、「ち光」がある。2は「さととの」(さとの)と墨書きされたかわらけで、他に人名を表す墨書きは、「お者つ」(おはつ)がある。3は唐の開元通宝(621年初鋤)。4は北宋の祥符元宝(1009年初鋤)。そのほかの渡来銭には、北宋の天聖元宝(1023年初鋤)、皇宋通宝(1038年初鋤)、明の永樂通宝(1408年初鋤)、同じく明の洪武通宝(1368年初鋤)がある。本邦銭には、古寛永・新寛永があり、5は古寛永、6は天保通宝が2枚接着している。

図版51-1は、江戸トンボ五色大玉と呼ばれるもので、重量42グラム、時期は19世紀と考えられる。風鏡などに使用したものであろうか。2の石臼と、9・10のざざえは、S E11出土で、15世紀代に位置づけられる。S E11出土のざざえは8個体あり、すべての貝殻に10と同様、内蔵を取り出すための直径2cm前後の穴があけられている。3~8の種と実は、整地層から出土した。11はS F106出土の鹿角で、他に整地層からも鹿角が1点出土している。12~14の著状の木製品は、整地層からの出土である。

図版 39



1. 建物の基礎

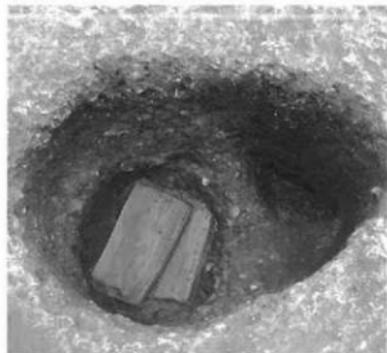


2. SB01・SA02

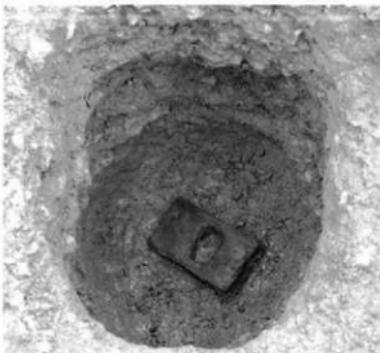


3. 調査区全景

図版 40



1. SP1382磁板



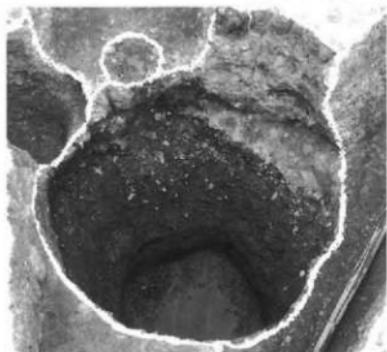
2. SP1385磁板



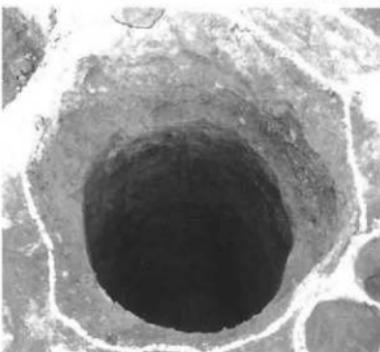
3. SF27根巻き石



4. SF05根固め石

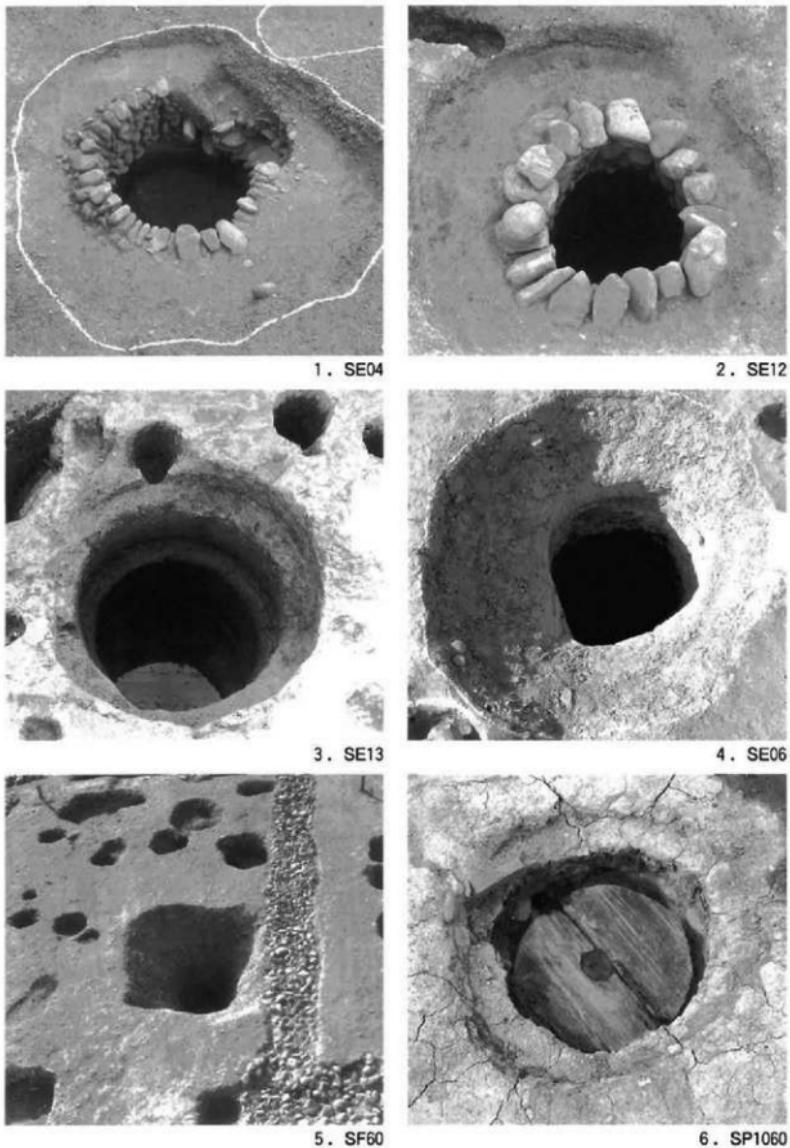


5. SF78



6. SE11

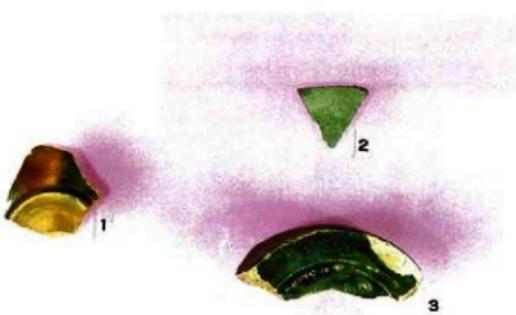
図版 41



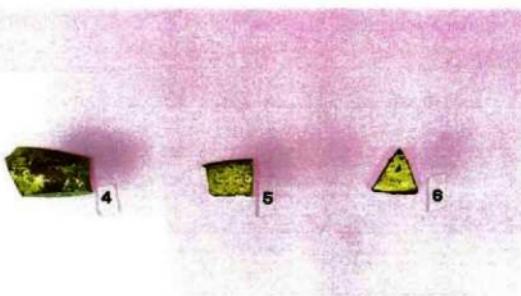
図版 42



図版 43



1. 二彩 (8C)
2・3. 緑釉陶器
(9C~10C)



4・5. 金箔かわらけ
(16C)
6. 金彩木製品
(16C)



7. 琥珀釉金彩鉢
(19C)
8. 染付皿(19C)
7. 口径17.2cm
高 7.4cm
8. 口径29.5cm
高 4.9cm

図版 44



1



2

1. 灰釉瓶子 (14C)
現存最大径17.0cm

2. 青磁碗 (14C)
口径16.6cm 高7.3cm



3



4



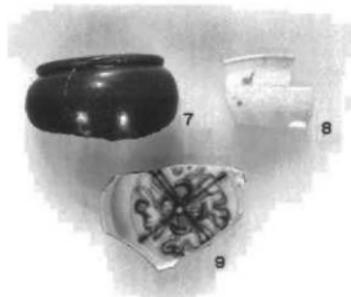
5

3・4. 碗 (14C~15C)
3. 口径16.3cm 高7.5cm

5. 卸皿 (15C)
口径13.6cm 高3.5cm



6



7

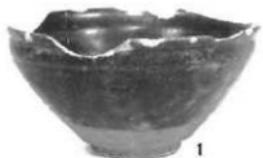
8

9

6. 香炉 (15C)
最大径8.0cm 高4.7cm

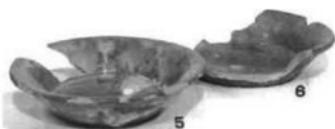
7～9. 輸入青磁・白磁・染付 (14C~16C)
7. 口径7.0cm 現存高4.6cm

図版 45



1. 天目茶碗 (16C)
口径12.2cm 高6.4cm

2~4. 盆 (16C)
3. 口径11.6cm 高3.1cm



5・6. 盆 (16C)
5. 口径10.7cm 高2.7cm

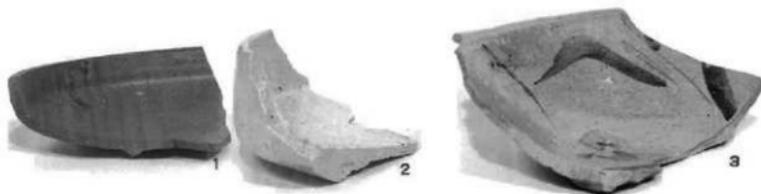
7. 鍋 (16C)
口径25.3cm 現存高12.9cm



8~10. かわらけ (16C)
9. 口径11.5cm 高3.4cm

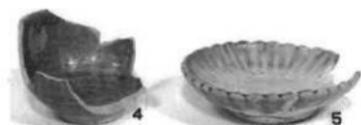
11. 羽釜 (16C~17C)
最大径28.8cm 現存高15.2cm

図版 46



1・2. 鉢 (17C)
1. 口径20.0cm 高4.8cm

3. 鉢 (17C)
口径35.4cm 高9.0cm



4. 碗 5. 盆 (17C)
5. 口径13.2cm 高3.6cm



6. 壺 (18C)
最大径13.5cm 高15.6cm

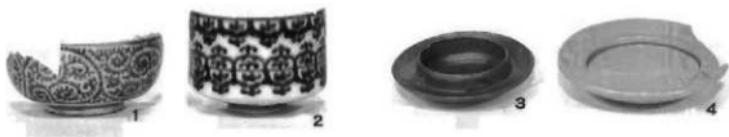


7. 白磁花瓶 (19C)
最大径21.6cm 現存高20.6cm



8. 火入れ (19C)
口径10.5cm 高7.5cm

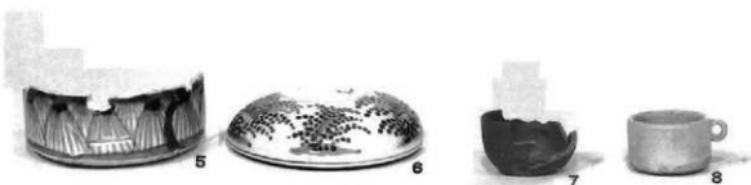
図版 47



1・2. 碗 (18C)
2. 口径8.2cm 高6.3cm



3・4. 灯明皿 (3:18C 4:19C)
3. 最大径8.6cm 高2.1cm



5. 段重 6. 蓋物 (18C)
5. 口径14.6cm 高6.1cm

7. 鉢 8. 顔猪口 (19C)
8. 口径4.6cm 高2.8cm



9. 蓋付き鉢 (19C)
口径12.6cm 現存高11.4cm



10. 片口鉢 (19C)
口径21.3cm 高10.3cm

図版 48



1



2



3

1. 盆 2. 蓋物 (19C)
2. 口径9.9cm 高2.8cm

3. 壺 (19C)
最大径27.0cm 高21.5cm



4



5

4. 蓋物 (19C)
幅7.4cm 現存長12.0cm 高2.0cm

5. 火鉢 (19C)
最大径33.8cm 高17.1cm



6

6. 鉢 (19C)
最大幅17.8cm 高13.5cm



7

7. すり鉢 (19C)
口径12.5cm 高5.6cm

図版 49



1. 鍋 (19C)
口径17.8cm 高7.4cm



2. ごね鉢 (19C)
口径29.2cm 高11.3cm



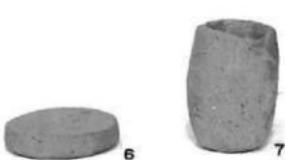
3. 手水鉢 (19C)
口径35.4cm 高14.5cm



4. し瓶 (19C)
最大径19.7cm 高15.2cm

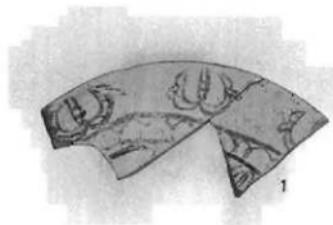


5. 風炉 (18C～19C)
最大径37.4cm 高19.5cm



6・7. 焼塩壺 (18C～19C)
7. 最大径6.2cm 高8.6cm

図版 50



1. 墨書き (17C~18C)



2. 墨書き (17C~18C)



3. 開元通宝 (7C) 4. 祥符元宝 (11C)
3. 直径2.4cm



5. 寛永通宝 (17C) 6. 天保通宝 (19C)
6. 長4.9cm 幅3.2cm

5.

6.



7.



8.

7. 小柄の柄 (17C~19C) 8. キセル雁首 (18C)
7. 現存長9.3cm



9. 把手 (19C)
幅7.9cm

図版 51



1



2

1. 江戸トンボ五色大玉 (19C)
全長3.5cm 最大径2.9cm

2. 石臼 (15C)
幅26.8cm 高7.7cm



3



4



5



6



7



8



9



10

3~8. 種実 (16C)
3・4: クルミ 5~7: 桃 8: ドングリ

9・10. サザエ (15C)
9. 全長9.5cm



11

11. 鹿角 (18C)
現存長18.6cm



12



13



14

12~14. 箸状木製品 (16C)
14. 現存長23.5cm

VII 龍華院地点

1. 調査の概要

調査原因 龍華院本堂・庫裡建設、学術調査
調査年度 平成11年度
調査面積 200m²
調査費用 1,033千円（龍華院負担770千円、国庫補助263千円）

2. 遺構の概要

龍華院は、明暦2年（1656）に時の城主北条氏重が三代将軍家光の靈を祀るために城内に建立した寺院で、大歓院靈屋は現在県の有形文化財に指定されている。この龍華院大歓院靈屋は、標高48.4mに位置し、城内では天守丸に次ぐ高所である。東西約40m、南北約55mの規模の平坦面に建てられていて、この平坦面の東端に南北方向の土壘があり、さらにその東側に上端の幅約15m、深さ約7.4m、長さ約62.5mの空堀が土壘と平行に存在する。靈屋の建つ平坦面の西側には、約2m低い、東西約34m、南北約38mの平坦面があり、かつて龍華院の本堂が存在した。

調査は、本堂が存在した平坦面に本堂と庫裡が建築されることになり、調査費用を龍華院の負担により実施した。また、大歓院靈屋の東側の土壘の調査を、国庫補助事業を行った。

図版52-1は、本堂部分から検出された石組み井戸で、規模は直径約1.1m、深さ約2.7m、長さ30cm～40cmの石を組んで作られていた。図版53-1は、この井戸を検出した状況で、2は石組みの状況である。図版52-2は、土壘を幅80cmの試掘溝で立ち割った断面である。土壘は、こぶし大の岩のブロックが多く量に混じる土と褐色土、または暗褐色土を交互に積んでいて、固く締まっていることから搾き固めていることがわかる。調査の結果、土壘は幅6m以上、高さ現存で2.1mと判明した。土壘の下には、暗褐色粘土が20cmほどの厚さで残っていた。図版53-5は、この層から掘り込まれた柱穴や、火葬骨片が混入する長方形の土坑である。図版54-2の天目茶碗は、土壘下から出土したもので、16世紀の中ごろに位置づけられる。従来、この土壘とそれに伴う空堀は、現在の掛川城が造られる以前の明応6年（1497）ごろから16世紀の初めごろに築かれたと考えられていたが、今回の調査により、土壘は16世紀の中ごろ以降のものと判明した。また、火葬骨を伴う土坑が確認されたことから、城が築かれる前は、墓地であったと考えられる。図版53-3は、直徑約80cmの穴の中に、図版54-8の口径40.4cm、高さ49.8cmの骨蔵器と考えられる甕を立てて埋め、甕の口と周囲に棟瓦を敷き詰めた墓跡と考えられる遺構である。6は、土壘の西側から検出された廐用棟瓦と炭が多く混入する瓦溜まりで、文化15年（1818）の大歓院靈屋の焼失と関連がある可能性がある。

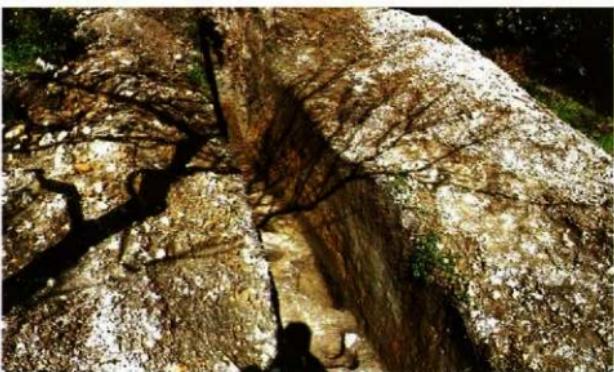
3. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、陶磁器、瓦、銭貨、飾り金具等がある。図版54-1の古銭の銭貨名は不明である。2は、天目茶碗の底部、3は、すり鉢の底部である。これらは、土壘下から出土したものである。5の碗は、井戸跡S E01から出土した肥前磁器で、これによりSE01の下限を17世紀前半に位置づけることができる。以上の遺物が、龍華院建立以前の遺物である。4・6～9が龍華院に関連する遺物で、4・7は志戸呂産で、7の皿の縁にはハート形の透かしが入れられている。6・9が肥前産の磁器、8は瀬戸・美濃産である。図版52-3は、建物の飾り金具である。

図版 52



1. SE01



2. 土壘の断面

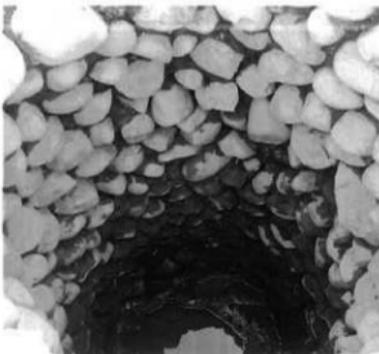


3. 飾り金具
(17C~19C)

図版 53



1. SE01検出状況



2. SE01の石組み



3. 骨蔵器



4. トレンチ全景

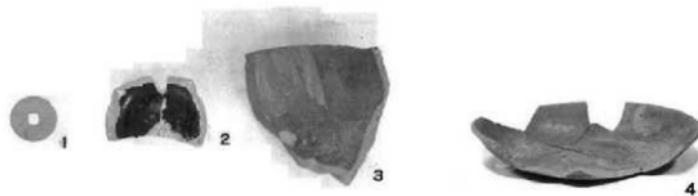


5. 土壘下の遺構



6. 瓦溜まりの状況

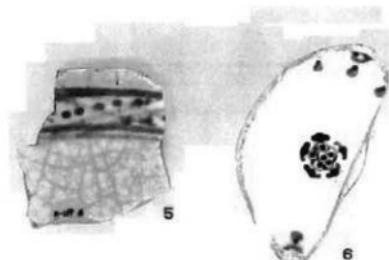
図版 54



1～3. 土壌下出土遺物

1. 直径2.3cm

4. 盆 (18C)
口径11.4cm 高2.2cm



5・6. 碗 (5:17C 6:18C)



7

7. 盆 (19C)
幅8.2cm 高2.0cm



8

8. 壺 (18C)
口径40.4cm 高49.8cm



9

9. 盆 (19C)
口径29.6cm 高4.5cm

VIII まとめにかえて

掛川城址 6 地点の発掘調査により検出された遺構と出土した遺物は、膨大な量にのぼっている。

今回、遺構の分析が十分なされていない状況であることから、膨大な量の出土遺物から限られた量を抽出して、紹介することとした。そのため、今後、分析が進めば今回の解釈と相違する点が数多く出てくることと思われるが、本概報を作成していく過程で気づいた点を列挙し、まとめにかえたい。

天守丸・本丸地点

- ・山内一豊による天守閣の築造前から、天守台部分は階台的に使用されていたことが明らかとなった。天守丸も天守台同様、一豊以前の遺構・遺物が確認された。このことから、天守丸は天守閣築造以前から眺望の効く、城にとって重要な場所であったことが明らかとなった。
- ・本丸からは、四半敷を伴う礎石建物跡が検出された。この建物跡は、整地土の上から検出されたことから城に伴うものであることは確実であるが、もっぱら禅宗寺院で使われたとされる四半敷を伴う建物の時期と用途が興味深いとともに、検討課題である。
- ・本丸の整地土の下から12世紀後半から16世紀前半にかけての中世墳墓群が検出された。部分的な調査ではあるが、本丸築造以前の土地利用と地形を知る手掛かりを得るとともに、城造成の手法の一端を知ることができた。
- ・本丸虎口は、内堀・十露盤堀・三日月堀の三つの堀で守りを厳重にしていて、各堀は、暗渠で繋がっていることが明らかとなった。暗渠は、堀が作られた時期と同じ16世紀前半の築造と考えられるが、十露盤堀から流れ出る暗渠は、堀の底から約1mの高さのところに、三日月堀から流れ出る暗渠は、底から約1.4mの高さにあり、当初は空堀を意図していたことが明らかとなった。それから約1世紀後の正保年間に描かれた正保城絵図では、三日月堀の水深1丈（約3m）とあることから、意図的に水堀に変えたか、暗渠が機能していなかったものと考えられる。

大手門地点

- ・大手門の礎石根固め等を検出したことにより、正確な場所と規模を知ることができるとともに、門と番所の配置を把握することができた。
- ・大手門が造られた場所は、軟弱な地盤のところであるため、門の重量を支えるために柱穴を深く掘り、根固めを行っていることが明らかとなった。
- ・12個以外にも大きな柱穴があり、時期的な変遷等まで分析をしていないが、大手門の建て替えがあつたことが明らかとなった。
- ・平安時代の綠釉陶器が、市内では、原川遺跡、梅橋北遺跡、原遺跡に次いで出土した。掛川城内からは、市立第一小学校と中央図書館の調査地点からも出土している。綠釉陶器は、主に当時の役所や寺院から発見されるものであり、寺院か役所が存在した可能性が高い。

山下郭(1)地点

- ・古者の記憶によると、この場所は典医戸塚三折の屋敷跡であったところである。建物が抽出でき、建物配置が明らかになれば、医師と武家の屋敷の相違などを検討することができる資料となる。また、S P 521・S P 1179・S P 1187のような他の地点からは検出されない性格の遺構が、典医戸塚三折と結びつくのかどうか、また、出土遺物を詳細に分類・分析すれば江戸時代の医術に結びつくものがあるのかどうか、今後検討する必要がある。
- ・弥生時代以降の様々な遺物が出土し、弥生時代の磨製石斧がまとまって出土したり、7世紀末から8世紀初めに位置づけられる三重弧文軒平瓦のように市内初の発見となる遺物もあり、築城以前か

らこの地が重要な場所であったことが明らかとなった。三重張文軒平瓦から寺院の存在が考えられるが、須恵器の器種は壺、鉢、四耳壺と思われるものがあるだけであり、他に寺院に結びつくような遺物も見当たらないので、再検討の必要がある。

二の丸地点

- ・明治時代に失われた御殿の勝手台所跡が検出され、江戸時代の絵図に描かれている勝手台所を検証できた。
- ・江戸時代の絵図に描かれていない箱掘を検出し、堀の中から18世紀後半から19世紀前半に位置づけられる遺物が出土した。今後、遺物を分析することにより、藩主の居所、藩の政府である二の丸御殿の様子が明らかになる可能性がある。
- ・弥生時代の方形周溝墓や平安時代の鏡を伴う土坑など、築城以前の土地利用の変遷を窺い知ることができた。

山下郭(2)地点

- ・古老の記憶によると、今回の調査地点には用人・吟味奉行などが住んでいたという。調査地点は、大手門から天守・本丸等の城の中核にいたる道筋にあたり、藩の上級武士に割り当てられていた。検出された建物は、江戸時代後半以降と考えられるSB01が、間口5間、奥行3間で面積60m²、19世紀以前と考えられるSB05が、間口5間、奥行3間で面積58.2m²である。この建物の規模を、文久2年の東海道日板宿の「宿内軒並取調書上帳」に見える百姓家と比較すると、SB01・SB02より大きな百姓家がある。今後、建物の規模について検討する必要がある。
- ・建物跡、井戸跡が検出され、分析することにより、屋敷の区画割りや時代による変遷を知ることができる資料となる。
- ・江戸時代の遺物は、雑器から茶の道具まで多岐にわたっていて、記録に表れてこない武家の生活を知ることができる。また、かわらけに書かれた墨書から精神生活の一端を窺い知ることができる。
- ・奈良時代の二彩が出土したことから、奈良時代に役所または寺院が周辺に存在した可能性が高い。

龍華院地点

- ・本堂、庫裡部分の調査地点は、絵図に描かれた本堂の裏側にあたるが、寺に関連する墓跡を確認でき、さらに寺院が建立される以前の井戸跡を検出できた。
- ・しっかりした礎石や柱穴は検出されていないが、建物が存在しなかったのか、後世の削平により失われたのか今後の課題である。
- ・土塁は、從来掛川古城の時期と考えられていたが、16世紀の中ごろ以降のものと確認できた。土塁に使われた土には、こぶし大の岩のブロックが多量に混じっていて、この岩のブロックは空堀を掘った時に出た土と考えられる。このことから、土塁と空堀は同じ時期のものであるという確証を得たが、基底幅6m以上の頑強な土塁、上端の幅約15m、深さ約7.4mという大規模な施設が、いつ、だれにより造られたのか検討する必要がある。
- ・土塁の下から検出された柱穴の時期と性格、墓跡と考えられる火葬骨を伴う土坑と本丸から検出された切石を使用した石塔を伴う墓の差が、年代によるのか身分によるのか等検討する必要がある。

参考文献

- ・掛川市『掛川市史』中巻 1984年
- ・掛川市教育委員会『掛川城復元調査報告書』1998年

報告書抄録

ふりがな	かけがわじょうしあはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	掛川城址発掘調査概要報告書							
副書名								
編集者名	前田庄一							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537) 21-1158							
発行年月日	西暦 2001年3月26日							
ふりがな 所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
掛川城址	静岡県掛川市 掛川1138-24外	22213	149	34度 46分 18秒	138度 00分 55秒	19890415 (19931129	5,000m ²	天守閣 復元事業
	静岡県掛川市 城下5-1外	22213	149	34度 46分 14秒	138度 01分 11秒	19930119 (19950324	1,655m ²	土地区画 整理事業
	静岡県掛川市 掛川1078-1	22213	149	34度 46分 21秒	138度 01分 16秒	19950607 (19951130	1,350m ²	小学校 プール 改築事業
	静岡県掛川市 掛川1142-1外	22213	149	34度 46分 21秒	138度 00分 58秒	19960223 (19971120	2,000m ²	美術館 建設事業
	静岡県掛川市 掛川1148-1外	22213	149	34度 46分 21秒	138度 01分 08秒	19980420 (19990705	5,000m ²	図書館 建設事業
	静岡県掛川市 掛川1104外	22213	149	34度 46分 27秒	138度 01分 12秒	20000107 (20000315	200m ²	寺院本堂 等建設・ 学術調査
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
掛川城址	城址・墓跡	中世・近世		登閣路・堀		陶磁器		
	城址	近世		大手門		陶磁器		
	城址	近世		柱穴・井戸		陶磁器、弥生土器		
	城址・墓跡	弥生時代・近世		堀・方形周溝墓		陶磁器、弥生土器		
	城址	近世		井戸		陶磁器、二彩		
	城址	近世		井戸・土壠		陶磁器		

掛川城址発掘調査概要報告書

平成13年3月26日

編集発行 挂川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1
TEL (0537) 21-1158

印 刷 株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537) 24-0013

